

G. ケラーの“Sinngedicht”に現われる さまざまな女性像について

中野和朗

ジュリエット、アンナ・カレーニナ、ペアトリーチェ、グレーチヒェン等々、世界文学の中に魅力的な女性像に事欠くことはない。19世紀のスイスの作家、ゴットフリート・ケラー(1819~1890)も、その膨大な作品の中に多くのさまざまな女性像を描いている。

ケラー文学の真骨頂は、初期の詩作、「ゼルトヴィラの人びと」、「マルチンザランダー」、「チューリヒ小説集」等、近代社会の疎外状況を、スイスの民主主義の精神とフォイエルバッハの哲学を思想的核とするいわゆる「批判的リアリスト」の目で捉えて、それをケラー独特のフォームに包んで表現した作品群である。しかしスイスのゲーテといわれるケラーの世界は更に広大であり、批判的精神に基づく基本的視点を保持しながら豊かなイマジネーションを駆使して創り出されたメルヒェンの作品群がある。その代表的作品として「七つの伝説」(Sieben Legenden. 1872)と「寓詩物語」(Sinngedicht. 1881)を挙げることができる。この両作品は、いわゆる“Galatea-Legenden”を共通の母胎としている双児の姉妹である。

ケラーは、1851年7月15日付ヴィーヴェク宛の手紙に“Sinngedicht”成立史に関する最初の情報を書き送っている⁽¹⁾。

Galatea-Legendeは、ローガウのエピグラムにヒントを得て書かれたものである。そしてそのテーマは、男女の愛情の問題と結婚の問題である。

ケラーは、実人生においては男女の愛の問題ではまことに悲惨であった。幾人かの女性たちとの恋愛のすべてに失敗した。

例えば、ヘンリエット・ケラー (Henriette Keller), マリー・メロス (Marie Melos), リーゼ・リーター (Luise Rieter), ヨハンナ・カッパ (Johanna Kapp), ベティ・テンデリング (Betty Tendering), ルイーゼ・シャイデッガー (Luise Scheidegger) などであるが、ルイーゼ・シャイデッガーとは婚約しながら、シャイデッガーの自殺によって不幸な結末に終わっている。彼女たちとの体験は、ケラーにとってすべて苦く哀しいものであった。ケラーは決して独身主義者ではなかったし、女性嫌いでもなかった。にもかかわらずケラーは生涯独身で終わったのである。

何故このような結果に終わったのか? この19世紀のドイツ文学最大のリアリズムの作家については幾多の伝記的研究があるが、とくにケラーをめぐる女性についてヴァルター・フーパー (Walter Huber) は、次のように書いている。

「ケラーは結婚しないまま独身で生涯を終った。かれはたしかに結婚しようと思ったし、そのためにはさまざまな準備もした。しかし成功しなかった。ともかく、かれは決して粗野な享樂的な人間ではなかった。かれの場合には見てくれの悪い殻につつまれて非常に繊細な核が宿っていたし、それはほとんど知られることはなかったのです。結婚のために差しのべられたかれの手をある女性が拒んだとすれば、それは間違いなくその女性がこの核を見てと

ることができなかつたことによつていた。またケラーはもともと結婚できないように生まれついていたのではないかと思われるのは、次の理由によつてゐる。つまり彼の体軀は見てのとおり背が低かつたし、見てくれもさえないものであつた。だからこれが恋人に嫌悪感を与えたのであつた。(中略) またかれの短足と鈍重な体軀と下半身の動きの悪さがかれを坐つたままにさせることになつた。』⁽²⁾

ケラーの恋の相手の女性が、ケラーをどう受けとめていたかの例として、例えば、ルーゼ・リーターは、母親宛に次の様に手紙で書き送つてゐる。

「ケラーはほとんどしゃべらず粘液質の性質であるように思えます。かれはたいへん背が低く、短足です。残念です！ 頭は決して悪いとは思えませんが、なんといつても額の広さは異様です」⁽³⁾

ケラーの不幸な恋愛の中で最も不幸だつたのは、ベティ・テンデリング (Betty Tendering) (1831—1902) に対するものであつた。ケラーは1850年4月から1855年12月までベルリンで過ごしたが、そこで、出版家ドンカー (Dunker) の家でリナ夫人 (Lina) の妹であるベティと知り合つた。ベティは才色兼備のたいへん魅力的な女性であつたようである。ベティは女性にもてないタイプのこの男の恋心に火をつけ、燃えたたせ、そして彼を拒絶した。ケラーのベティへの想いは一途で激しかつたが、それだけに失恋の痛手は大きかつた。当時の手紙や、日記帳に書きつけられた落書きは、その状況をありありと想像させる。

ケラーが、フリードリッヒ・フォン・ローガウ (1640—1655) のエビグラムに触発されて『Galatea-Novelle』の構想を描き始めたのは、丁度このころである。そしてこの不幸な「テンデリング体験」が、ケラーの創作活動に大きな作用を及ぼしたことは否定できず、それがその後の作品の女性像の中にゆたかな実りをもたらした。

例えば、ハンス・ヴュスリング (Hans Wysling) はこう書いている。

「ハインリヒ・レー (『緑のハインリヒ』の主人公の名) のドルトヒェン・シェーンフント (bella trobata, B. T., Betty Tendering!) への恋の中にケラーは、自分のベティーへの恋の夢のヴァリエーションを描き始めていた。ふくれっ面のパンクラーツの中で彼は、ベティに腹いせをしている。つまり、美しいリュディアは、ここではコケトリイな女性として登場しており、パンクラーツを弄ぶのである。かの女は自分以外の誰をも愛することができないが、にもかかわらず全ての人の愛を欲しがるといふナルチス的な自己顕示のかたまりである。同様なコケトリイな女性像は、『七つの伝説』の中のドロテアもそうであるし、『ツェーリヒ小説集』の中の『グライフェン湖の代官』に登場するヴュンゲルガルト、『ディーティゲン』のキュンゲルトまた然りである。そしてまたルチアでさえも初めの内は独りよがりの気取り屋となつてゐる。』⁽⁴⁾ 「Sinngedicht」の中では、ベティーはルチア像の中に投影されているが、ここではケラーの哀しいまでのベティに対する理想的願望が具現されている、と見ることができる。

ハイネの美しい恋愛詩の数々は、詩人の苦く痛ましい失恋の体験から創り出されたといふことは、すでによく知られてゐるが、ケラーの場合も事情は同じであるといえる。

ところで、この「寓詩物語 (das Sinngedicht)」という名の短篇集は、構成の点では夫々独立したお話 (Erzählung) を連ねた13章から成る「短篇連作集 (Novellen Zyklus)」であり、ボッカチオの「デカメロン」と同種の「枠小説集 (Rahmenerzählung)」である。13章

のうち冒頭の章は、中年の自然科学者の主人公ラインハルトが、ローガウのエピグラム集の中の二行詩「いかにして君は白い百合を紅いばらにしようというのか？／白いガラテアにキスをしてごらん、きっと顔を紅に染めて微笑むことでしょう。(Wie willst du weiße Lilien zu roten Rosen machen? / Küß' eine weiße Galatee : sie wird errötend lachen.)」に触発されて、長年の研究生活にコンマを打って、恋のアバンチュールに旅立つ経緯についての話であり、いわばこの連作集のイントロ部分である。そして2章から13章までが、夫々独立した物語りとなっている。

各章とその内容の概要は次のとおりである。

第1章：主人公が恋愛の真実を証すための実験をおこなうため旅に出るにいたるいきさつ、その動機について。

第2章：第1回目の実験、橋守りの娘（笑ったが、顔は赧らめなかった）。

第3章：第2回目の実験、牧師館の娘（真赤になったが、笑いがなかった）。

第4章：第3回目の実験、「黄金の角笛」館の娘（笑うであろうが、赧くはなるまいとの予感から実験未遂）。

第5章：森の中を迷い歩いたあとでルチアの邸にたどりつく次第。ルチアとの出会いについて。

第6章：ルチアの身辺についての説明。

第7章：ラインハルト対ルチアの恋愛物語合戦の開始。ルチアの語る第1話、「黄金の角笛館」の娘ザロメの物語。

第8章：ラインハルトの語るレギーネの物語。

第9章：ラインハルトの語る男爵夫人ヘートヴィヒ・フォン・ローハウゼンの物語。

第10章：ルチアの伯父の語るヒルデブルクと2人の恋人たちの物語。

第11章：ラインハルトの語るドン・コレアとセルカール及びザンボーの話。

第12章：ルチアの語るテイボーとネックレスの飾り紐にまつわる物語。

第13章：ルチアが語る改宗をめぐる身の上話、そしてエピグラムの実験が成功した次第。

以下にこの作品に現われる主な女性像を列挙して、それぞれについて考察することしよう。

1 橋守の娘 (die Zöllnerstochter)

恋の冒険旅行に出たラインハルトが最初に出会ったのは、橋守の娘である。この娘は「蒼いほど色白で美しくすらりとした姿、綺麗な陽気な顔、向う気の強そうな目つきをしている。」彼女の話しによると、幼なじみの建築家の男がかつて彼女の恋人であったが、そこにかかっている橋を作る仕事を得るために、彼は議員のみにくい娘と結婚した。彼は、栄達と引き換えに、恋を捨てた情ない男だといっているのである。「好きでもない女を貰い、そのあとでほかの女が見たくってしょうがない。そのくせ勇気もない、——そんな男は役立たずの取るにたらない人間です。(中略) 橋の方をお流れにして私の方を取ることもできたはずですよ。そうすればやはり彼はもう一つの美しいものを得られたでしょう。」⁽⁵⁾ という言い分には、利害得失と結婚を天坪にかける疎外された人間への批判精神がみてとれる。しかし一方で自分

の美を鼻にかける自惚れも現われている。ラインハルトは、最初の「白い百合を紅いばらに変える」初の実験を試みる。

ラインハルトは、橋の通行税を渡すかわりに接吻を求めた。娘はいったんは断わるが、ラインハルトはお金を娘の手に置いた。「すると娘はあぶみに足をかけ、手をかしてやるとひらりと彼のところまで立上り、首に手を捲きつけて、笑いながら接吻した。しかし顔は赧らめなかった。その白い面には赧らめるにもっとも都合のよい、もっともふさわしい場所があったのだが。」⁽⁶⁾

ラインハルトは橋を渡ってひとりごちた。「第1回は、実験は成功しなかった。」⁽⁷⁾

2 牧師館の娘

ラインハルトはある村にさしかかり、旧知の牧師館を訪ね、歓待される。牧師の娘に会うが、「彼女の頬はほんのりとした紅に彩られ、長めの鼻は真面目な指針のようにうやうやしく地面を指し、慎しやかな眼差しも、鼻に従って地面に向いていた。」⁽⁸⁾ 娘は目を伏せたまま客に挨拶し、すぐ台所に姿をかくした。やがて別れ際にラインハルトに友人宛の一通の手紙を託し、かれの旅行の道すがらそこに立ち寄って手紙を渡して欲しいと頼む。ラインハルトはそれを引きうける代りに接吻を所望し2回目の実験を試みる。「震えながらも彼女は立ち止った。そればかりか彼が抱くと爪立ちさえし、目をつぶって接吻した。顔は隅から隅まで真赤に染まった。しかし微笑だけはなかった。むしろまるで聖さん式でも受けているかのよう真面目でうやうやしかった。」⁽⁹⁾ かくして今回も実験は失敗に終わったのである。

彼女は、聖職者の娘にふさわしく、旧来の道徳律に抑圧されて生きているのであり、とくに男女の愛情問題に対しては、抑圧された自己表現とならざるを得ない。それから解放された者の自己表現としての笑いは、当然のことながら欠如せざるを得ない。

3 宿屋の娘

ラインハルトは、大きな森のはずれにぼつんとある宿屋の前を通りかかった。それは「黄金の角笛館」といった。かれはその宿屋のロビーで針仕事をしている立派な体格をした女性を認めた。彼女は「牧師の娘や橋守りの娘と甲乙つけがたい美人であったが、比較にならないほどたくましかった。」⁽¹⁰⁾ 彼女は、「紅い縁のついた細い褶のある黒いスカートと、眩いほど真白なブラウス」を着ていた。彼女は、家人が外出していたので一人で留守番をしていたこの宿屋の娘であった。

ラインハルトは、ワインを注文する。ワインを運ぶ娘の身のこなしを眺めながら、その美しい姿に感嘆してこうひとりごちる。「何とまあこの世は美しい者達で一杯なのだろう。しかも一人として全く同じものはない。(Wie voll ist doch die Welt von schönen Geschöpfen und sieht keines dem andern ganz gleich!)」⁽¹¹⁾ ラインハルトとこの娘が、ことばを交しているうちに、それが“口説き合戦”へと様相を変えていく。愛嬌があり、コケトリイで、大人の遊び心を心得ている宿の娘の積極的なことばにラインハルトはたじたじとなる。圧倒されながら彼は、3回目の実験をこころみようとする。しかし彼は恐れた。「多分笑うであ

ろう、だが赧くはなるまい、と。』⁽¹²⁾で、彼はもはや無用な実験をこれ以上企てることを断念し、さらに旅をつづけるのであった。今回の実験でも条件は半分しか満たされなかったのである。

4 ルチア

牧師館の娘から託された手紙をとどけるために目指す館に向う脇道へと入って行く。森の中を踏み迷った挙句ようやくその館にたどり着く。牧師の娘の友人で手紙の受け取り人はその邸の女主人ルチアであった。このルチアこそちにラインハルトの実験を完成させる人間となるのであるが、ルチアとの出会いについて書かれている第5章、ルチア的生活状況を説明している第6章をのぞいた残りの章、即ち第7章から第13章までは、いわば実験のプロセスの展開であり、最終章の第13章においてその結果が語られることになる。実験のプロセスは、風変わりで粹なテーマにふさわしく、二人の主人公たち夫々の恋愛観の論争が、幾つもの恋愛物語の合戦の形で展開される。

ところでルチアは、すでに述べたようにケラーのベルリン時代の哀しい失恋の相手ベティ・テンディングの像の肯定的な形象といえるが、ルチアの身边は次の様に描写されている。

ルチアにはすでに両親はなく、兄弟姉妹もない。父親の遺産を相続してこの広大な邸に後見人の伯父と共に不自由なく活らしている。無名の画家の絵を評価してコレクションをしたり、広い分野に亘る多量の蔵書を持っている。部屋の調度品やそれらの蔵書やコレクションなどは「自由で寛大な心のしるし」と判断される。さらにいくつかの外国語や古語の勉強もしていることが判る。そして「これらのことからラインハルトは嫌厭なしに尊敬と驚嘆の念をいだかずにはいられなかった。」⁽¹³⁾しかもルチアは「美しく成熟し、生き活きとした容姿 (die schön gereifte und frische Erscheinung)」⁽¹⁴⁾をしていた。

要するにルチアは美人であり、芸術的感覚や教養も豊かで、知識欲が旺盛で、はつらつと生きていて、仕事を几帳面にきばきと処理する“スーパーキャリヤウーマン”的存在だということになる。しかもそればかりではない、重要なのは、ラインハルトに「何故こんなにいろいろな事をやっているのですか」とたずねられた時、彼女は「彼を大きな目で見詰め、目に見えて赧くなった。(Viel mehr sah ihn das schöne Fräulein groß an und errötete sichtlich)」⁽¹⁵⁾ことである。つまりルチアには、“キャリヤウーマン”たちには得てして失われがちな「恥じらい」の心とか、心のデリカシイを解する「優しさ」といった大切なものが備わっているということである。出会いとともにこのようなルチア像が描かれてしまえば、結末がどうということになるかはおよそ割れてしまっているといえる。

5 「黄金の角笛館」の娘ザロメ

ラインハルトが実験を断念したあの宿屋の美しくたくましい娘については、実は結婚直前に破局を迎えた不幸な恋物語があったのである。ルチアがその一部始終をラインハルトに語って聞かせる。それによるとその娘はザロメといい、美人であるがろくに教育も躰も受けていない。しかし生まれつき口達者で外向的な性質である。だから深い思考や教養に欠けてい

でも一見したところは海千山千の利口者に見えた。自分を客観視できない人間は珍しくないが、ザロメの場合もそうであった。そういう人間はえてして自分が世界の中心と考え、自分の言動を省り視ることがない。そこから滑稽なほどに愚かしい事柄が生起する。ザロメは自分にふさわしい立派な若い紳士をあまりにも主観的な“女性的魅力”を武器として掴まえようという望みを持った。そして遂に町の資産家の一人息子で、教育も受けた美男子の若旦那ドロゴに的を定め、婚約までこぎつけた。しかしそれは二人の愛情に基づくものではなく、いうなれば“物のはずみ”とか“運命のいたずら”に依るといった方がより適切であった。この婚約が悲劇的結末に到った原因は、二人の社会的境遇、家庭、育ち等々の外的条件の不整合に依っているが、もっと大きな問題は、ドロゴ自身もザロメに劣らず愚かしい人間であったことである。ドロゴは自分の愚かさを棚にあげザロメの愚かさを非難した。「利口さこそは自分の本来の面目、守本尊、肝心かなめだと思っていた」⁽¹⁶⁾ ザロメにとってそれは耐えがたいことであった。即刻、ドロゴの許を去り実家の「黄金の角笛館」に戻った。そしていまも未婚のままそこにいて、一向衰えを知らぬ小ざかしさと愚かさで男たちを翻弄することに哀れな喜びを満たしているというのであった。

物語はそれを語る人間の頭と心を通して語られる。だからその語りの中に語る者の物の観方、考え方が表出されるのである。ザロメの話の中には、したがってルチアの男女の愛のあり方についての考え方が現われていると見ることができる。それによれば、人間は、とくに女性は無学、無教養であってはならない。出生、境遇があまり不均合いではいけない、結婚には男女の相愛が前提でなくてはならない、といったことがルチアの考え方として推察できる。その根底にあるのは女男平等の主張である。ルチアはナイーブながら女性解放の思想の持ち主なのである。

6 レ ギ ー ネ

ザロメについての話しを聞いたラインハルトは、ルチアに反論したい気分になり、不幸な目にあったザロメを擁護する弁舌をふるう。

「彼女は予想もしなかった誇りある諦めに到ったのだけれど、それは、私にはほとんどこういうことを証明しているように思えます。つまり、空想の中だけの長所でも、彼女が侮辱されたり疑われたりすれば、実際に身につけている美德と同じような作用を及ぼし得るということです。例えば、愚かしさも、もし自分の空想上の利口さが攻撃されると、その苦しみの中で結局は本当に賢く、慎み深くなり得るのです。」⁽¹⁷⁾

これに対してルチアは応える。「あのひとは、紳士方とも駄目ですし、お百姓たちともものはやうまくいきません。でも同じ身分の男とでしたらまだしも幸福にやっていたかもしれませんし、そういうひとなら考えの方も同じ程度で、毎日のきびしい仕事にかまけて彼女の利口でない点もそれほど気にならなかったかもしれません。そしてきっとあのひとの中に何物にも替えがたい大切なものを見つけたかもしれません。」⁽¹⁸⁾ この意見に対してラインハルトは反論する。ラインハルトの主張の要点は、男女の円満な愛情の関係は、決して身分や教育の程度の違いによって妨げられるのではなく、最終的な要件は、「深い個人的な好感 (ein gründliches persönliches Wohlgefallen)」⁽¹⁹⁾ だ、というのである。「もう幾年となく朝に夕

に見ていても、その度に新しく見えねばならないものです。つまり顔は、精神的人間であろうと肉体的人間であろうと人間の看板なのです。顔はとうてい長い間人を欺いていることはできないし、結局は練りかえし好きになって、たとえ嵐や艱難をとともなっても二人を結びつけるものなのです。」⁽²⁰⁾ 同じことがさらに次の様に述べられている。「賢く、本当に教養のある男こそ、何処の出だとか、何者だとかを意に介さず妻を娶り、愛することができるのです。かれの選択の範囲はあらゆる階級、生活方式、あらゆる気質と財産状況を含んでいます。ただ一つのことだけは超えることはできません、超えればきっと道を誤ってしまいます。即ち、彼がその顔を好きでなければならず、後になっても練りかえし好きにならねばならないということです。それができればこの道のマイスターとなり、妻を自分のお好みどおりにすることができるでしょう。」⁽²¹⁾

ナイプではあっても女性解放の思想を持つルチアにとってこの考え方は、当然素直に肯定できるものではない。男というものはあいも変らずとどのつまりは、人間性とか人格とかいったものよりも可愛いらしい顔を女性評価の基準としてはばからぬことに我慢ができないのである。そこで、ラインハルトは、「身分もあり教養もある若い男が、実際に女中さんをかまどの傍から連れて行って、その女中さんが世間に比肩できる社交婦人となるまで幸福と一緒に暮した」⁽²²⁾ 事例について物語ることになる。

レギーネというのはその女中さんの名前である。レギーネは、立派な体格をしていてその身のこなしはゆったりとした美しさに満ちていて、そのすべてを支配し、釣合いよくまとめているのが、落着いて整った顔であった。しかもその顔には、まるで透明な水晶の陰影のように軽く滑らかな、一抹の無意識な憂いが気品を添えていたのである。エルヴィン・アルテナウアー（若い男の名）は、この魅力的なレギーネの顔から自分を解放することができなかったのである。

エルヴィンとレギーネの運命悲劇的話しを聞き終ったルチアは、エルヴィンの愛には、この世の虚栄がつきまわっていると批判した。

7 ヘートヴィヒ・フォン・ローハウゼン（男爵夫人）

翌日ラインハルトは、求めに応じてルチアと彼女の伯父に、豪勢な“Treppenheirat”の物語、純粋な同情からの結婚の物語りをする。

若い法律家のブランドルフは、裕福な家を出で、正義と人道を愛する男である。たまたま貸間によって生計をたてている評判の悪い男爵夫人を知る。噂によると彼女は意地の悪い悪魔のような人間で、吝嗇で、口うるさく、非情で、強欲だというのである。これを聞いてはもはやブランドルフの矯正屋の虫が治まらなくなった。この魔女のような男爵夫人の根性を正そうと彼女の貸間を借りて住むことになる。彼女はいつも灰色の衣装で身を包み、頭巾の様な布で顔を包んでいたが、その下にかいま見た顔は「円っこい品のよいあご、小さくて厳しく締った口、その上にいくらか尖った鼻」で構成されていて、「殆ど透き徹るような白さで古いドイツの尼僧」のようであった。下宿人としてしばらく同じ屋根の下で暮らしているうちに夫人の正体が噂とは大分違うことが判ってくる。そしてある時、この男爵夫人が病氣となった時、真相が明かとなった。夫人はおよそ不正や邪悪とは無縁な人間で、あまりにひ

どい貧乏を恥じて、それをかくそうとして人間嫌いになっていたのである。彼女は男爵フォン・ローハウゼンの娘として、騎兵大尉フォン・シュヴェントナーと結婚したが、3年間の結婚生活の後離婚したのである。それは夫と夫の兄弟がやくざな男たちで、夫人の財産をかすめとったからであった。ブランドルフは夫人の不幸な身の上を知り、その逆境の中にあっけて決して人間としての美しい心を失なわなかった夫人の生き方の真実を知って心動かされたのである。

病気が快復に向ったある日、ばらの花を男爵夫人のところに持って行った。花を受け取った夫人の「蒼ざめた顔の上には、仄かな紅味がばらの花のそのように拡がってゆきました。同時にこの色と結びついて、微笑が浮かびました。それは、例のあの古いエビグラムの句を思いおこさせました。」⁽²³⁾

こうしてブランドルフとヘートヴィヒは、ラインハルトの求める理想的なカップルとして幸せな結婚をしたのである。

8 ヒルデブルク

ルチアの伯父がラインハルトとルチアの論戦の中に加わり、ルチアに加担して彼自身の若いころの恋物語を語る。その話のヒロインがヒルデブルクであるが、ヒルデブルクというのは実はラインハルトの母親である。

西ドイツの文学都市で法律学を学んでいたところ、マンネリーンという友人がいた。街の銀行家の家でその娘ヒルデブルクと知り合った。2人の法学生はともにヒルデブルクを好きになる。しかし折しもナポレオン軍との戦いのためプロシャ軍の連隊に入り2人は同時に出征することになった。ヒルデブルクは生きて帰った方と結婚することを約束する。やがてマンネリーンの戦死の噂が流れ、1年3ヶ月ぶりに伯父はヒルデブルクに再会する。しかしその時ヒルデブルクがより多く愛していたのはマンネリーンであることを伯父は察した。やがて、マンネリーンも生還する。彼は負傷したが助かったのである。3人は再会を喜び合った。しかし再び連隊に出動命令が出て2人の恋仇はまたヒルデブルクと別れねばならなくなる。出発の前夜銀行家の家で送別会が開かれる。ヒルデブルクは、その邸にまつわるクラット婆さんの幽霊の話を利用して、2人の恋人を試した。その結果マンネリーンが冷静にふるまって勝利を得た。ヒルデブラントの本名は、エルゼ・モールラントと云い、のちのラインハルト教授夫人、つまりラインハルトの母親である、ということも伯父は明したのであった。

両親にまつわる恋物語を聞いてラインハルトは複雑な気分になった。そして次のような感慨をいだいたのである。「矢張りそうだ、と彼は考えた。彼女たちは自分が男に劣らじということに何れだけ価値を置いていることか。だから、僕は、我々から理性を奪おうとしない静かな、穏やかな、従順な女性の落ち着いた選択の方を称賛する。だけどそういう女たちはたいてい接吻しても癪くはなるが、笑わないのだ。笑うためには必ずすこしばかりガイストが要るのだ。動物は笑いはしない。」⁽²⁴⁾

9 セルカールとザンボー（マリア）

ルチアの蔵書の一冊の本の間に挟んであった紙片に書きつけられていたことばに興味を唆られ調べてみると、奇妙な結婚の逸話を見付けた。その話しがたいへん気に入ってラインハルトはそれに潤色して長大な恋物語をつくる。それは、「男に劣らじとする婦人たちの驕慢に対する武器としては、素晴らしく有効に思えた。」⁽²⁵⁾

主人公はポルトガルの海上の英雄ドン・サルヴァドール・コレアと彼が愛した代表的な2人の女性セルカールとマリアの物語である。

それはひとことでいえば、身分が高くて立派な名のある男が、名もない女を文字通り地面から拾いあげ、妻にして共に幸福に暮らすことになる話である。しかし主人公はその幸せを手に入れるために、あらかじめ苦い愛の体験を嘗めるのである。

生涯の伴侶を探すことを思い立ったコレアは、出来るだけ忠実で心から服するような妻を得たいと思う。そこで彼は全く名もない貧乏じみた男に身をかえて妻探しを始める。彼はまもなくポルトガルの金持ちの若い未亡人、ドンナ・フェニーツァ・マヨール・デ・セルカールを見染める。苦心惨憺の後彼女に近づき、なんとか婚約にまでこぎつける。しかしセルカールは、自分の財産に目をつけた悪人と誤解し、そのためコレアは婚礼の夜あやうく命を失う目に遭う。こうしてコレアの最初の花嫁探しは大失敗に終わった。

10年後コレアは第2の妻をめとることになったが、その女性は、アンゴラ王国の女奴隷、ザンボーである。ザンボーは、上品な顔立ちをしており、古代エジプトの女性の典型的な顔であった。そしてその姿全体は高貴で優美であった。この10年の間決して女に心を動かされることのなかったこの男が、ザンボーを見て、突如として魔法か啓示に動かされたようになった。その後さまざまな数奇な運命を巡った挙句コレアはザンボーと結婚することになった。結婚してドンナ・マリア・コレアとなったザンボーは、幸せな結婚生活の中で、次第に啓発され新しい豊かな自分を形成し、キリスト教社会の中に順化していった。

“Sinngedicht”は、この後さらに2つの章が続くが、女性像ということに的をせばれば、ここまでである。小説のしめくりは、予想されたとおり、ルチアとラインハルトは接吻し合った。ルチアはあのローガウの箴言そのままに、色白の頬を真赤に染め、そしてにっこり微笑んだのであった。ここでラインハルトはようやく実験に成功したのである。

ラインハルトは、「ひとつとして同じ像のものはないこの世を彩っている美しいもの」の中から、もっとも魅力的なものとしてルチアを選び出した。すでに述べたとおり、ルチア像は、ベティがこうあってくれたら！というケラーの彼女への切なる願望から創られたものであって、だからルチアはケラーにとっていわば「永遠に女性的なるもの」といえるであろう。

この小説は、いささかも女性解放思想を鼓吹するものでもなければ、性のモラルを説いているものでもない。強いていえば、彼岸賛美のキリスト教的倫理を激しく批判し、此岸を肯定し、現世賛美を説いたフォイエルパッハの共鳴者として、ケラーは明るいフモールの中で健康な男女の愛の賛歌を高らかに詠うことによって地上での健気な人間の生の営みへの愛を表明しているということは言い得る。しかしこの作品をこのような何か思想とか理念を求め

る姿勢で読むのは妥当ではなく、むしろ通俗的な読み物として、読む者の頬を思わずゆるませてしまうケラーのあの独特の語り口を享しむのが賢明であろう。

註

- (1) >Ein Bändchen heiterer Erzählungen ausgedacht,< die er >diesen Herbst zur Erholung von dieser trübseligen Berlinerzeit schreiben will.< (1851年7月15日付 Vieweg 宛)

さらに、1860年4月22日付フライリヒラート宛書簡に Sinngedicht について書かれている。

“Ferner sind nächstens fertig……zwei Bändchen Novellen mit dem Titel: >Die Galatee<. Einer liest Logaus Distichen ;

Wie willst du weiße Lilien zu roten Rosen machen ?

Kuß eine weiße Galatee, sie wird errötend lachen ! und reist aus, das Ding zu probieren, bis es am Ende des zweiten Bandes gelingt.

In diesen Novellen sind unter anderm sieben christliche Legenden eingeflochten, Ich fand nämlich eine Legendensammlung von Kosegarten in einem läppisch frömmelnden und einfältiglichen Stile erzählt……in Prosa und Versen. Ich nahm sieben oder acht Stück aus dem vergessenen Schmöker, fing sie mit den süßlichen und heiligen Worten Kosegärtchens an und machte dann eine erotisch-weltliche Historie daraus, in welcher die Jungfrau Maria die Schutzpatronin der Heiratslustigen ist.“

さらに1853年 Vieweg 宛に次のように書き送っている。「Die Novelle: Galatea ist die Hauptnovelle und geht durch den ganzen Band, wogegen die übrigen in jene eingeschaltet werden.」

また、Karl Reichert は次の様に書いている。

「Die Bezeichnung >Galatea-Novelle< bleibt damit der Ober-und Sammelbegriff für alle — ausgearbeiteten oder nur gedanklich konzipierten — Vorstufen der >Sieben Legenden (1872)< und >Sinngedicht (1881)<。」(K. R.18 ページ)

- (2) Walter Huber: Gottfried Keller und die Frauen. Ferdinand Wyss-Verlag. Bern. 1919. 11ページ

ジ

- (3) 同上, 26ページ

- (4) Hans Wysling: Gottfried Keller. Artemis-Verlag. Zürich 1990. 216 ページ.

- (5) 「Sinngedicht」のテキストとしては G. Keller: Sämtliche Werke in acht Bänden. Aufbau-Verlag, Berlin 1958. を底本として用い必要に応じ他の版を参考にした。本文からの引用はこのテキストによった。同書394ページ。

- (6) 同上, 395ページ

- (7) 同上, 395ページ

- (8) 同上, 396ページ

- (9) 同上, 398ページ

- (10) 同上, 400ページ

- (11) 同上, 401ページ

- (12) 同上, 404ページ

- (13) 同上, 416ページ

- (14) 同上, 417ページ

- (15) 同上, 417ページ

- (16) 同上, 429ページ
- (17) 同上, 431~432ページ
- (18) 同上, 432ページ
- (19) 同上, 432ページ
- (20) 同上, 433ページ
- (21) 同上, 434ページ
- (22) 同上, 434ページ
- (23) 同上, 522ページ
- (24) 同上, 575ページ
- (25) 同上, 577ページ

<テキスト>

“Sinngedicht”のテキストとしてはG. Keller: Sämtliche Werke. in acht Bänden. Aufbau-Verlag Berlin, 1958.を用いた。

なお、「白百合を紅い薔薇に」(寓詩物語) 道家忠道訳, 岩波文庫, 昭和29年を参考にした。

<主な参考文献>

- ・ Hans Wysling: Gottfried Keller. Artemis Verlag, Zürich 1990
- ・ Walther Huber: Gottfried Keller und die Frauen. Ferdinand Wyss- Verlag. Bern. 1919.
- ・ G.Keller: Galatea-Legenden. Insel-Bücherei Nr. 829. Insel-Verlag. Frankfurt am Main 1965.
- ・ Henrich Brockhaus: Kellers <Sinngedicht>. H. Bonvier u. co. Verlag. Bonn 1969.
- ・ Emil Ermatinger: Gottfried Kellers Leben. Artemis-Verlag. Zürich 1950.
- ・ 吉田正勝:「ケラーの小説に登場する女性像の考察」北大文学部紀要.